

靜嘉堂本『王右丞文集』刊刻年代考

内田 誠 一

一、はじめに

靜嘉堂文庫に所藏される宋版『王右丞文集』十卷は、北京圖書館所藏の宋版『王摩詰文集』十卷とならんで、王維の詩文を研究する上で缺くべからざるテキストである。現時點で、王維の宋版はこの二種⁽¹⁾が知られているのみであり、またそれぞれ傳世が確認されているものが一本ずつという、まさに「海内孤本」である。靜嘉堂本『王右丞文集』(以下、靜嘉堂本と略記)は、小林太市郎氏によって學界はもとより世間に廣く紹介され、以後、入谷仙介氏や原田憲雄氏は、この靜嘉堂本を底本としながら、傳記や詩文の研究を進められた。しかし、テキスト自體についての書誌學的研究は、あまりなされてこなかったようである。

本稿では靜嘉堂本の刊刻年代について考察したい。同本の刊刻年代について、宋代ということでは全く異論がないと思われるが、その具體的年代という點になると、未だ定論をみないからである。小稿では、靜嘉堂本を精査した上で、その刊刻年代について検討を加えたいと思う。

二、清朝藏書家たちの審定と評價

清朝の藏書家たちは、この現・靜嘉堂本をどう審定し評價していたのであろうか。まず清初の錢曾の『讀書敏求記』卷八上には、『王右丞文集』十卷について次のような記載が見られる。

此刻是麻沙宋版。集中「送梓州李使君」詩、亦作「山中一半雨、樹杪萬重泉」。知此本之佳也。(此の刻は是れ麻沙宋版なり。集中の「梓州の李使君を送る」の詩は、亦た「山中 一半の雨、樹杪 萬重の泉」に作る。此の本の佳なるを知るなり。)

錢曾は、『王右丞文集』を麻沙本であるとした上で、このテキストを「佳」なるものとしている。

錢曾の没後一世紀餘りの後、現・靜嘉堂本は汪士鐘の藏に歸していた。汪士鐘からこのテキストを借りて影寫(しきょうつし)した顧廣圻は、靜嘉堂本の第一冊卷首の副葉に識語をこう書き入れている。

此麻沙宋刻王右丞詩文全集十卷、道光丙戌歲(内田注：道光六年、一八二六年)、從藝雲主人借出、影寫一部、復徧取他本勘其得失。雖宋刻亦有誤、而不似以後之妄改。究爲第一也。遂題數語於帙端。餘文繁不具出。思適居士顧千里(此の麻沙宋刻王右丞詩文全集十

卷、道光丙戌の歲、藝芸主人より借り出して、一部を影寫し、復た徧く他本を取りて其の得失を勘ふ。宋刻亦た誤り有りと雖も、以後の妄改には似ず。究むるに第一と爲すなり。遂に數語を帙端に題す。餘文繁く具さには出さず。思適居士顧千里)

顧廣圻もこのテキストを麻沙本であるとし、宋刻本には誤りがあるけれども、後世の版本にみられるような「妄改」がないので、これは第一のテキストであると結論している。顧廣圻の識語は、所藏者汪士鐘の求めに應じて、謝禮の意味もこめて記されたものと考えられる。だがその贊辭は、所藏者への阿諛追従から發せられたものではなく、顧廣圻の率直な感想とみてよいであろう。

清朝末期になると、このテキストは陸心源の皕宋樓に藏せられた。陸心源は「宋本『王右丞集』跋」(『儀顧堂題跋』卷十)において次のように記している。

『王右丞文集』十卷……宋諱有缺有不缺。南宋麻沙坊本、往往如此。『王右丞文集』十卷……宋諱 缺く有り缺かざる有り。南宋麻沙坊本、往往にして此のごとし。

陸心源は、宋諱が嚴格でないことから南宋の麻沙本、それも坊刻本であるとしている。ただ、テキストの評價に關しては言及していない。錢曾・顧廣圻・陸心源、この三者はいずれも、このテキストを「麻沙本」と考えていたようである。「麻沙本」とは福建建陽の麻沙鎮で刊刻された版本を指す。葉夢得の『石林燕語』の卷八には次のようである。

天下印書、以杭州爲上、蜀本次之、福建最下。……杭州但紙不佳。蜀與福建多以柔木刻之、取其易成而速售。故不能工。福建本幾徧天下、正以其易成故也。(天下の印書は、杭州を以て上と爲し、

蜀本は之に次ぎ、福建は最も下る。……杭州は但だ紙のみ佳ならず。蜀と福建とは柔木を以て之を刻し、其の成し易くして速やかに售るを取る。故に工みなる能はず。福建本の幾んど天下に徧きは、正に其の成し易きを以ての故なり。)

建陽の麻沙鎮では柔らかい木を版木にして粗製濫造したため、後に「麻沙本」というと、誤謬が多くて印刷の悪いテキストの代名詞になつてしまつたのであつた。「建本」「麻沙本」というと悪いイメージがつきまとうが、十把一絡げに劣本と斷ずるのは早計であるようだ。北京圖書館編『中國版刻圖録』では宋刻建本の書影を二十五種掲げているが、精刻である上に内容もすぐれている善本も少なからず存在することが知られる。

さて、靜嘉堂本はその麻沙本なのであろうか。傳增湘は、先ほどの顧廣圻の説に異を唱えている。

『王右丞文集』十卷。按、此書、刊工古樸、當爲南渡初鑄。雖偶有補刻之葉、亦復疏雋可喜。顧千里跋乃謂爲麻沙本、何耶。『王右丞文集』十卷。按ずるに、此の書、刊行古樸、當に南渡の初鑄たるべし。偶ま補刻の葉有りと雖も、亦た復た疏雋 喜ぶべし。顧千里の跋に乃ち麻沙本たりと謂ふは、何ぞや。)

傳增湘はこのテキストを南宋初期のものとして、さらに「補刻の葉」があることに言及し、麻沙本ではないとしている。

麻沙本か否かについては、錢曾・顧廣圻・陸心源の三者と傳增湘とは見方が異なるが、四者がこのテキストを南宋のものと考えていたことでは一致している。顧廣圻は「南宋」と記してはいないが、麻沙鎮において書籍の刊刻が發達したのが南宋頃であるので、「麻沙本」と鑑定したということは、刊刻の時期を南宋と見なしていたと考えてよ

いであらう。

傳増湘がここで補刻の葉(ページ)の存在を指摘したことは的確であり、刊刻年代を考える上で重要なポイントとなってくる。しかし、傳増湘はどの部分にどの程度「補刻の葉」があるのか具體的に記してはいない。傳増湘の息、傳熹年氏も「參觀靜嘉堂文庫札記(下)」で原版・補版に言及しているが、原版で残っているものは多くない、とだけ説明している。そこで今回、筆者は靜嘉堂本の中の原版と補版を調査した。これから先行諸論を検討しつつ、具體的刊刻年代を絞っていくに當たり、まずはじめに、その調査の結果判明した原版と補版の情況について報告しておきたい。

三、原版と補版の識別

靜嘉堂本の刊刻年代を考察するため、その複製本を仔細に眺めてゆくうちに、漫漶(文字が摩滅して不鮮明)なること甚だしい葉と、文字のハネや拂いに刻刀の刃えをとどめる清新なる葉とが混在することに気づいた。そしてそれは單に兩種に分類できるものではなく、版木の摩滅状態も多種多様に亘ることが見て取れた。この印象は、靜嘉堂文庫における原本の閲覽を通して確信にまで深められた。さらに精査すると、漫漶なる葉は全體からすると極めて少ないことが確認された。即ち原版と思われるものはほんの僅かであり、補版がほとんどであるということである。また界間(野と野の間隔)にはっきりとした廣狹の別があることがわかり、各葉の版框の大小を測定したところ、「漫漶なる葉に共通する寸法」が存在することが判明した。

漫漶なる葉は例外なく界間が廣く、枠幅(版框の横の長さ・ここでは界間の廣狹を比較するため、子持ち枠の部分は含めずに測定)が一

〇・一種から一〇・五種である。一方、鮮明な葉は、一〇種を越える例外も一割強あるものの、九・五種から一〇・〇種と界間の狭いものがほとんどである。

さらに、版框の縦の長さについても判然とした違いが見られた。漫漶なる葉をその長短で二種に分類できる。一種は、最も摩滅の甚だしいグループで、例外なく縦の寸法が極めて長く、一六・一種から一六・七種である——これらは原版であると考えられる。もう一種は、原版と考えられるグループほどではないが、少なからず摩滅の見られるグループで、縦の寸法が極めて短く、一五・二種から一五・五種までのもの——これらは古い方の補版であると考えられる。

一方、甚だ鮮明な葉ないし比較的鮮明な葉は、例外なく一五・六種から一六・五種の範囲にあり、二種の漫漶なる葉の中間に位置する長さである——これらは新しい方の補版であると考えられる。

なお、巻頭の目録十二葉は界間が最も廣く、版框の横の寸法が一六種と突出しており、この十二葉だけ他葉と比べて版框の大きさが特殊であることを付言しておく。

では、鮮明な葉であるにもかかわらず枠幅の狭いものがあるという例外、そして漫漶なる葉であるのに縦の寸法に長短兩種があるという事實は何を意味しているのであろうか。それは、刊刻時期に違いがある、と考えてよいだろう。前述の通り、版木の摩滅状態も多種多様に亘るようであって、漫漶なる葉の中にも漫漶の程度に、鮮明な葉の中にも鮮明さの程度に、それぞれ違いが見られるのである。この事實は即ち、このテキストが、長い年月を経るなかで摩滅の酷い版木を随時彫りなおして、幾度となく補版を組み入れられてきた「遞修本」であることを物語っているように。

さて、これらの版框の大小と刻工名とを結びつけて考えると、刊刻された時期によって、各葉を三つのグループにはっきりと分類できるようなのである。(『靜嘉堂本』『王右丞文集』原版、新舊補版一覽表)および書影1〜3参照)

まず、原版は、界間が廣く且つ版框の縦の寸法の極めて長いもので、文字が著しく漫漶であるもの。具體的には、「吳」「周」という刻工名の入った葉のうち漫漶なること甚だしいもの。刻風ないしは鮮明不鮮明の違いによって、「吳」と名の刻された葉は四種に、「周」と名の刻された葉は三種にそれぞれ分類できるが、ここでは四種の「吳」のうち原版の「吳」二種を、假に吳(甲)・吳(乙)とし、三種の周のうち原版の「周」を周(甲)と名づけることにする。また、葉の多くは版心の上魚尾に、例えば「王六」のように「王」字の下に卷數を添えた二字が刻されるが、原版はどの葉も「王文」「王集」「文集」「王右」という二字の下に卷數を添えた三字が例外なく刻されているという共通点も見受けられる。

次に、補版の中で比較的古い部類に屬するもの(舊補版)は、原版と同様に界間が廣いが、版框の縦の寸法は原版とは異なり短く、文字が原版ほどではないが不鮮明なるもの。具體的には、刻工名の無い葉(無名葉)と「二」及び「三」と刻工名が數字で示される葉、そして原版とは別人の二人の「吳」(假に吳(丙)・吳(丁)と名づける)の葉と「黃石」名の葉。

そして最後に、補版の中で比較的新しい部類に屬するもの(新補版)は、上記に屬さない全ての葉。具體的には、「周」と刻されたもの二種(假に周(乙)・周(丙)と名づける)と「茂」「先」「發」「洪」「信」「江?」「月?」「祥」「不」「俊」「仁」「阮」「通」「木」「光」「永」

「正」「共」「山」「兆」「明」「上」という一字が刻された葉と、「成信」「余彦」「阮光」「吳正」「劉光」「官先」「余兆」「杜明」「江陵」「叔明」という二字が刻された葉である。新補版の中で、一字名の葉と二字名の葉とは刊刻の時期を異にしていると考えられる。よって一字名の刻工と二字名の刻工で同一人物が存在することも考えられよう。

四、『歲寒堂詩話』竄入の問題

さて、最近の研究者は靜嘉堂本をどう分析しているのであろうか。現代中國の王維研究者である陳鐵民氏は、靜嘉堂本の刊刻年代を推斷するにあたり、『王右丞文集』卷六の末尾に刻された文章に着目された。それは、卷六の第十六葉に五行にわたって刻された、韋應物と王維の詩を比較した文章である。

韋蘇州詩、韻高而氣清。王右丞詩、格老而味長。雖皆五言之宗匠、然互有得失、不無優劣。以標韻觀之、右丞遠不逮蘇州。至其詞不迫切而味甚長、雖蘇州亦不及也。(韋蘇州の詩、韻高くして氣清し。王右丞の詩、格老いて味長し。皆な五言の宗匠と雖も、然れども互ひに得失有りて、優劣無きに^あらず。標韻を以て之を觀れば、右丞は遠く蘇州に遠はず。其の詞の迫切せずして味甚だ長きに至つては、蘇州と雖も亦た及ばざるなり。)

陳鐵民氏は、『王維集校注』の付録「王維集版本考」において、この部分について次のように論じている。

按ずるに、このテキスト卷六の末尾にある跋文は、張戒の『歲寒堂詩話』の卷上の一節を記したものである。張戒は南宋初期の人。『歲寒堂詩話』卷上には、「乙卯の冬に陳去非(與義)が初めて私の詩を見たが……」という記述がある。乙卯とは即ち紹興五年

(一一三五)であり、『歲寒堂詩話』の完成は疑いなく紹興五年よりも後である。よって、この靜嘉堂本の刊刻時期は、必ずや『歲寒堂詩話』の成立年代よりも更に後のこととなる。

靜嘉堂本卷六末尾に刻された五行が『歲寒堂詩話』の一節であるという指摘は注目すべきものである。ただ、この指摘は、靜嘉堂本の刊刻年代を推理する上での判断材料の一つとはなり得ても、そのみを論據として靜嘉堂本の刊刻年代を断定することは困難であると思われる。なぜなら、靜嘉堂本は前述したように遞修本であり、全ての版刻が同一時期になされたものではないからである。

陳氏の指摘と小稿の原版・補版の調査とを考えたならば、次のことが導きだせよう。『歲寒堂詩話』が刻されている巻六の第十六葉は補版であり、また補版の中でも版刻の新しい部類に入るものと判断された。とすると、新舊に分類される補版のうち、新しい方の版刻時期の上限を、ひとまず紹興六年(乙卯の翌年)とすることができよう。ただ、詩話の一節が竄入したとすれば、詩話成立から上梓の運びとなるまでの時間を考える必要がある。また意圖的に組み込まれたとすれば、詩話成立から上梓を経て巷間に流布され、『歲寒堂詩話』を讀んだ版元ないしは版下職人がその一節を『王右丞文集』に組み入れる時間を考慮に入れなければならない。とすると、この補版の實際の版刻時期は、紹興七年(一一三七)以降とみるべきであろう。

五、「太上御名」の解釋をめぐって

(1) 米山氏の解釋

さて一方、靜嘉堂文庫の米山寅太郎氏は、テキスト卷八の第十七葉「爲相國王公紫芝木瓜讚 并序」の中に現れる避諱に着目された。

朕與卿道契雲龍、義同水石、位崇台袞、寄重股肱、故得【太上御名】祥荐臻、靈物昭格、君臣同德、區宇克寧。(朕、卿と道は雲龍に契り、義は水石に同じうし、位は台袞を崇び、寄は股肱を重んず。故に【太上御名】祥 荐^{かき}ねて臻り、靈物 昭らかに格り、君臣は徳を同じうし、區宇は寧きを克くするを得たり。)

米山氏は、この「太上御名」の太上を皇帝の父の意ととり、仁宗の諱である「禎」を當て得るとしている。なお、この【太上御名】祥荐臻」の部分は、北京圖書館所蔵の宋版『王摩詰文集』や趙殿成『王右丞集箋注』及びその他諸本全てが「嘉瑞荐臻」に作っている。

ここで少し疑問が生まれる。「太上」を皇帝の父の意と理解してよいのだろうか、「太上皇」の意と解釋できないだろうか、という素朴な疑問である。英宗(趙曙)は仁宗の子ではなく、濮安懿王允讓の子であり、仁宗の甥にあたる。また仁宗(趙禎)は太上皇になっていないのである。もちろん、「太」の字には俗用として、「世代が上である」という意味がある。たとえば「太公」は父親の意以外に、祖父・曾祖父の意があり、また老人に對する尊稱としての用法もある。しかし、「太上御名」の場合、一般的に「皇帝の父」という意味で用いられるのであろうか。

假に「太上」を米山氏のように解釋したとしても、「御名」の部分に問題が残るのである。御名とは一般に現存する皇帝・太上皇の名について言う語であり、崩御した皇帝、歴代皇帝の名は「諱」と言い「御名」とは通常言わないということである。また、假にこの部分が仁宗の名を避けているとするならば、「芝草者延壽之徵也」(同じ第十七葉の前半葉第八行)の「徵」(仁宗嫌名)の字はなぜ避けていないのだろうか。もちろん諸版本の中には皇帝の諱のみを缺筆によって避

け、嫌名は避けていない例が少なくない。しかし、ここでは缺筆を用いず、「太上御名」と恭しく殊更に避けているのであるから、この刻工の——版下職人と刻工が別人であるならば、版下職人の——避諱に對する意識は高いように思われる。それでいて「徵」字は缺筆にもしていないのはどうしたことであろうか。やや疑問が残るのである。

米山氏の説を成り立たせるには、次のような極めて特殊な情況を想定しなければならぬであろう。それは、原刻では、この「太上御名」の部分は、避諱でよく見られる「今上御名」となっていた。時代を経て原刻の版木が摩滅したため、改めて彫りなおす必要が出てきた。その際、皇帝はすでに代替わりしていたので、「今上」の「今」の字を「太」の字に置き換えて「太上」とし、現在の皇帝よりも前の世代の皇帝を表すことにした、という情況である。けれども、以前の皇帝の諱であれば、缺筆にすればそれで済むわけで、わざわざ「太上御名」とする必要はないのではなからうか。

(2) 他書にみえる「太上御名」という避諱の形式

同じ「太上御名」の避諱の形式が、他書にもあらわれる。たとえば、乾道年間(一一六五—一一七三)に刊刻されたとされる内閣文庫所蔵の『東萊先生詩集』。その巻六の「題秦悼秀才園亭(秦悼秀才の園亭に題す)」という詩の起句に「秦郎重【太上御名】水邊亭」とある。高宗(趙構)が紹興三十二年(一一六二)に退位して淳熙十四年(一一八七)に崩御するまでの期間、「太上皇」と稱した。「太上御名」が太上皇・趙構の「構」の字を避けており、この部分は本来「秦郎重構水邊亭(秦郎 重ねて構ふ 水邊の亭)」であったと考えられる。事實、四庫全書では「構」に作っている。

また、靜嘉堂文庫が所蔵する嚴州小字本『通鑑紀事本末』では太上

皇趙構の「構」の字を「太上御名」、孝宗趙昀の「昀」(慎の異體字)の字を「御名」とそれぞれ註しており、北京圖書館が所蔵する『莆陽居士藝公文集』では、「構」の字を「太上御名」、「昀」の字を「今上御名」とそれぞれ註しているようである。趙構が太上皇であった期間に刊刻された版本では、このような避諱の形式が、決して例外ではなく一般的に行われていたことがわかる。なお、南宋紹興刊本『白氏文集』では「犯御名」と注して「構」の字を避け、「犯御嫌名」と注して「遵」の字を避けている。よって、この『白氏文集』は高宗在位中の刊行されたものと考えられている。この當時、現存の皇帝や太上皇の諱は缺筆にするよりも、「御名」、「犯御名」、「太上御名」などと注することで避けていたようである。参考までに避諱の様々な形式を次

歴代皇帝の諱や嫌諱を避ける場合

……廟諱・御諱・□宗廟諱・□宗御諱・□宗嫌諱など

太上皇帝の御名を避ける場合

……太上御名

今上皇帝の御名や嫌名を避ける場合

……御名・今上御名・犯御名・犯皇帝御名・今上嫌名・犯

御嫌名など

(3) 太上皇趙構の諱及び兼諱と太上皇趙昀の

兼諱とをそれぞれ充當した場合

さて、靜嘉堂本に話をもどしたい。王維の「爲相國王公紫芝木瓜讚并序」の「故得【太上御名】祥荐臻」の「太上御名」について、筆者は當初、太上皇趙構の諱を避けたものと考え、「構」を充當して「構祥」としてみた。すると、「故に祥を構えて荐ねて臻り、靈物 昭

らかに格り、君臣は徳を同じうし、區宇は寧きを克くするを得たり。」となる。

「構祥」は見慣れぬ語であるが、「構禍（わざわいをかまへむすぶ）」という熟語があることを考えると、「構祥」はさいわいをかまへ結ぶ意と取ることができよう。けれどもここは四字の對句であるので、「靈物昭格」との對應關係から言えば、「構祥荐臻」は「嘉瑞荐臻」に及ばないと思われる。「荐臻」の直前にはやはり名詞が来るほうが安定する。他の可能性はどうであろうか。この「太上御名」の部分が太上皇の兼諱（嫌名）であったと考えるならばどうなるだろうか（正確に注記するならば、本来「太上嫌名」とすべきところであるが、「太上御名」の注記がよく使われていたので、兼諱の注記に援用したと假定する）。趙構の兼諱に「毅」字があり、これを充當すると「毅祥」となる。毅には善の意があり、「善祥」と同義と考えられよう。すると思義的には、他本の作る「嘉瑞」とほぼ同義の名詞となり得る。しかし「毅祥」は見慣れぬ語であり、可能性は低いとみるべきであろう。もうひとり太上皇となった人物に、徽宗趙佶がいる。徽宗は宣和七年（一一二五）十二月に皇太子趙桓に皇帝の位を譲り、太上皇となった。そして、翌々年の靖康二年（一一二七）二月に金人によって劫掠され、紹興五年（一一三五）四月に五國城にて崩御。紹興七年（一一三七）九月に凶聞が江南にもたらされた。その兼諱に「吉」の字がある。この「吉」の字を「太上御名」の部分に充當してみると、

朕 卿と道は雲龍に契り、義は水石に同じうし、位は台榭を崇び、寄は股肱を重んず。故に吉祥 荐ねて臻り、靈物 昭らかに格り、君臣は徳を同じうし、區宇は寧きを克くするを得たり。

となる。「吉祥 荐ねて臻り、靈物 昭らかに格り……」ときれいな

對になり、意味上も「吉祥」は「嘉瑞」と同義で、すこぶる安定するのである。「爲相國王公紫芝木瓜讚 并序」は、相國である王瑛が兩親を亡くして嘆き悲しんでいた時、紫芝が棟に生じ木瓜が林に生え出たという瑞祥を記したものである。「太上御名」を含む對句の部分は、王公が紫芝・木瓜の圖を描いて皇帝に進上したことに對する返報の詔である。最後の贊のところに「嘉應薦至、其故何祥」とある。よって「吉祥」の部分は、全體の流れや贊との關係から考えても、嘉瑞・吉祥・嘉祥などのめでたい語が来るべきであり、「吉祥荐臻」とすれば、修辭（對句）・意義の兩面からすっきりしたものとなる。よって、「太上御名」には「吉」の字を充當し得る可能性が高いものと思われる。

六、新舊補版・原版刊刻の時期と場所

新しい補版である「太上御名」の一葉は、文字の鮮明度から考えて、前述の『歲寒堂詩話』の一節が刻されている卷六第十六葉よりも、やや古い時期に刻されたものと考えられる。具體的には、徽宗趙佶が太上皇となってから、金人によって劫掠されて彼の地で崩御し、その情報に刻工を含む一般民衆に達するまでの期間、即ち宣和七年（一一二五）から紹興七、八年（一一三七〜三八）ごろまでに刻された可能性が高いであろう。

この「太上御名」の一葉の版心には、刻工名「永」が刻されているが、同じく「永」の刻された葉がもう一葉存在する。それは卷十第三葉「能禪師碑」ではじまる一葉であり、これもまた新しい補版に屬する。兩葉は、その刻風や字體から同一刻工の手になるものと思われる。二葉を比較すると「能禪師碑」の葉の方が少し鮮明さに缺けるとい

象であることから、「太上御名」の一葉は「能禪師碑」の一葉より後に刊刻されたと見るべきであろう。「能禪師碑」の一葉の前半葉第二行第八字に「源」字が出現する。欽宗趙桓の兼諱であるその「源」字は最終畫を缺いている。よってこの「能禪師碑」の一葉は、少なくとも欽宗の靖康元年（一一二六）以降に刻されたものとひとまず考えられよう。しかし、刻工（＝版下工を兼ねるものと判断される）「永」が卷八の第十七葉において、「太上御名」という避諱の形式をとっていることを考えると、同刻工は欽宗の兼諱を「今上御名」ないしは「今上嫌名」とする可能性が高い。とするとこの一葉は、高宗即位後の建炎元年（一一二七）以降に刻されたと考えるのが穩當であろう。さらにその下限は、「太上御名」の一葉との關係から言えば、紹興初年と判断されよう。

新しい補版の中には、刻工名が二字刻されているものも少なくない。傅熹年氏は「參觀靜嘉堂文庫札記（下）」において、補版の刻工余彦は南宋紹興間の贛州州學刊《文選》に、江陵、杜明、劉光の三者は南宋孝宗朝の《三朝名臣言行錄》に、それぞれ名が見えることを指摘している。

以上のことから、新しい補版は南宋に入って紹興・隆興・乾道・淳熙年間の約六十年の間に數回に分けて刊刻されたものと見ることができよう。新しい補版の中に、頗る鮮明な葉と、それに比べて鮮明度のやや落ちる葉とが混在しているのも、かかる刊刻情況を考えれば合點がゆくであろう。

次に古い補版について考えてみたい。古い補版の中で二字の名を版心に留めているのは「黄石」ただ一人である。瞿冕良編著『中國古籍版刻辭典』の黄石の項には「南宋乾道間刻字工人」とある。しかしそ

の根據は示されていない。また『中國版刻圖錄』や『靜嘉堂文庫宋元版圖錄』を見る限り、諸本にその名が散見される刻工ではなさそうである。假に『中國古籍版刻辭典』の記載に従って乾道年間の刻工としてみよう。その活動時期を約三十五年と長めに想定しても、活躍の初期を北宋の末年にまで遡ることは困難である。新しい補版の刊刻時期は、すでに紹興年間から淳熙年間までに絞られている。古い補版の時期は、北宋の後期から末期ごろと考えざるを得ない。とすると、黄石を乾道年間の刻工とみなすことは不可能であり、「乾道間刻字工人」とする記述は、信を置きたいと言わざるを得ない。古い補刻は北宋の後期から末期にかけて行われ、新しい補刻は紹興・隆興・乾道・淳熙年間の約六十年に行われたものと考えてよいであろう。

さて原版の刊刻はいつであろうか。まず避諱的情況を見てもみることにする。原版は漫漶であって、缺筆か摩滅かの判別に困難を極めることがあるものの、英宗の諱「曙」や兼諱の「樹」を避けていないように思われる。ところが、古い補版、例えば卷二第四葉では「曙」（前半葉第七行と後半葉第三行）「樹」（前半葉第十一行）の字を缺筆にしている。一方、新しい補版は避諱には無頓着ないしは嚴密でない。これは、南宋初期には避諱の制度が嚴格でなかったことに原因しているものと考えられる。これらの點から、原版は英宗以前に刊刻された可能性が高いと判断されよう。ただ、原版そのものが少數であるため、材料に乏しく確定することは極めて難しい。

陸心源が「宋諱 缺く有り缺かざる有り」という避諱の不統一の原因を、麻沙本である點に歸したのは誤解であった。靜嘉堂本は遞修本であり、刊刻の時期が各葉異なっていること、特に南宋初期は避諱が嚴密でなかったことなどから、テキスト全體を通覽すると避諱が嚴密

でなく、統一感に缺けるものと見えてしまったのであろう。

それでは刊刻の場所はどこであらうか。現代中國の傅熹年氏がこう分析する。

詳細にこのテキストの刻風を調べたところ、決して麻沙鎮の劣本ではない。その刊刻時期と場所は、刻工と字體を根據として探り求めることができよう。……補版の中で、刻工名が姓と名の備わっているものに、江陵・余兆・余彦・吳正・成信・杜明・阮光・官先・劉光・黃石などがある。そのうち余彦の名は南宋・紹興年間に贛州州學が刊行した『文選』に、江陵・杜明・劉光の三者の名は南宋・孝宗時代に江西で刊行された『三朝名臣言行錄』に、それぞれ見える。……以上の點から考えると、この『王右丞文集』は實は江西の刊本なのである。……注目に値するのは、このテキストが、北京大學圖書館所藏の北宋末刊本『孟東野詩集』と、版式や刻工において共通する點がかなり多いことである。兩本の原版の字體とその摩損情況も同じであり、補版の刻工もまた同じ顔ぶれであることが多い。(參觀靜嘉堂文庫札記(下)(1))

ここで傅熹年氏は、靜嘉堂本をその刻風から絶対に麻沙本ではないとし、その補版製作に従事した刻工の名から、靜嘉堂本は江西刊本であるとしている。また、北京大學圖書館所藏の北宋末刊本『孟東野詩集』と版式や文字に共通する點が多く見られることから、「北宋末年江西刊南宋遞修本」であると推斷している。この類似性について、筆者が北京大學圖書館のマイクロフィルムで『孟東野詩集』を閲覽したところ、版框の大きさも文字の刻風も似ており、特に漫漶な葉の文字の摩滅した様子が酷似していることを確認した。

靜嘉堂本は原版・補版ともに傅熹年氏の指摘通り、江西刊本とすべ

きものと思われる。なお、『中國版刻圖錄』では『孟東野詩集』について、原版が僅かに十一葉しかなく、そのうち四葉は一部分補版が混ざっていることある。遞修本であること、原版が殆どないことまで共通していることは興味深い。ただ、小稿における調査分類から考えると、靜嘉堂本の原版の刊刻時期は、傅熹年氏の言う北宋末年より、更にさかのぼりうる可能性があると思われる。

さらに付言するならば、靜嘉堂本は、原版の刊刻が北宋であるという刊刻時期の古さや、蜀本(北京圖書館所藏宋版『王摩詰文集』)との編次の明確な相違、王縉の「進集表」に他本には無い「寶應二年正月七日」の年記をとどめている特殊性などから總的に判斷して、先行諸家の指摘通り、「建昌本」ないしは「建昌本」系のテキストであることにほぼ間違いないであらう。

七、結論

一、靜嘉堂本『王右丞文集』は原版と補版から成るが、そのほとんどが補版であり、原版は僅か十二葉、全體の十分の一にも満たない。

二、補版はさらに、版刻時期の新舊によって少なくとも二種に分類できる。各葉を、原版、新・舊補版という三つのどのグループに分類すべきかは、文字の鮮明度に加えて、版框の大きさや版心の文字・刻工名などによって識別しうる。

三、第二期の補版作製の際に、卷六末に見られる『歲寒堂詩話』の一文が竄入した。

四、「太上御名」の避諱は、文意、補版の刊刻時期、そして同一の刻工が別の葉で欣宗の兼諱を缺筆にしていることなどから、太上皇・趙佶の嫌名である「吉」の字を避けたものと考えられる。

五、古い補刻は北宋の後期から末期にかけて行われ、新しい補刻は南宋に入り紹興・隆興・乾道・淳熙年間に數回に分けて行われたものと考えられる。

六、原版の刊刻時期は、その避諱の情況から英宗以前かと思われるが、なお憶測にとどまる。

七、原版・補版の版刻が行われた場所は、傅熹年氏の指摘通り、江西とするのが穩當である。

八、靜嘉堂本は「建昌本」ないしは「建昌本」系のテキストであると考えられる。

注

(1) 二種の宋版の版式と次序の異同については表1を参照されたい。

(2) 本文は叢書集成本による。なお、「百重泉」を「萬重泉」としているのは錢曾の記憶違いと思われる。

(3) 顧廣圻の言う後世の版本における「妄改」が何を指しているのか、俄かには判断しがたい。

(4) 本文は光緒十八年序刊本による。

(5) この「柔木」は、従来「榕樹」とされてきたが、最近の調査研究を総合すると、建陽本に用いられた版材は梨の木であると推定されるという(坂出祥伸先生教示)。坂出祥伸・小川陽一編『中國日用類書集成』の「解説——明代日用類書について」(坂出祥伸)では、『石林燕語』のこの部分や多くの文献を引用しつつ、考證がなされている。

(6) 文物出版社一九九〇年刊の増訂本を参照。北京圖書館に所蔵される宋刻『易經』(建陽・坊刻)は、徽宗の瘦金體の影響を受けたかと思われる優美な書體で刻され、内容も他本に勝っており善本とされる。同じく北京圖書館蔵の『新校正老泉先生文集』は、吳炎の校勘を経て建陽の書

靜嘉堂本『王右丞文集』刊刻年代考

肆が上梓したものとある。

(7) 『藏園群書經眼記』卷十二

(8) 『書目』(中華書局・一九九一年二期)

(9) 版框の測定には複製本(雄松堂書店・一九七七年)を用いた。

(10) 現段階で筆者は、その刻風から少なくとも「余」と「余兆」とは同一人物であると判断している。

(11) 「按、此本卷六末的跋語、係錄自張戒《歲寒堂詩話》卷上；戒南宋初期人、《歲寒堂詩話》卷上曰：「乙卯冬、陳去非(與義)初見餘詩……」乙卯即紹興五年(一一三五)、《歲寒堂詩話》之成書、無疑當在紹興五年之後、而此本之刊刻時間、則必更後於《歲寒堂詩話》的成書年代。」

(12) 『王維集校注 四冊』中華書局・一九九七年

(13) 「宋版 王右丞文集 複製解題」(注9所掲本の付録)。雄松堂書店の複製本刊行以後に靜嘉堂文庫が編纂した『靜嘉堂文庫宋元版圖錄 解題篇』(汲古書院・一九九二年)の「王右丞文集」の項を見ると、複製解題で北宋の英宗から神宗に遡りうるとした解釋を改めて、南宋初期刊としているが、「太上御名」にはやはり「禎」字を當て得るとしている。

(14) 北京師範大學・啓功教授教示。

(15) 原版・補版の調査において、その文字の結體などから、版下工と刻工は同一の可能性が高いと判断された。

(16) 注12所掲の『靜嘉堂文庫宋元版圖錄 解題篇』参照。

(17) 注4所掲の北京圖書館編『中國版刻圖錄 增訂本』参照

細審此本之雕工風氣、絕非麻沙鎮劣本、其刊刻時地、尙可據刻工及字體推求而得。……補版中、刊工名完整者有江陵、余兆、余彥、吳正、成信、杜明、阮光、官先、劉光、黃石等人。其中餘彥見於南宋紹興開禧州州學刊《文選》、江陵、杜明、劉光三人見於南宋孝宗時江西刊《三朝名臣言行錄》……據以上諸證、此《王右丞文集》實是江西刊本。……值得注意的是此本與北京大學圖書館所蔵北宋末刊本《孟東野詩集》在版式

刊工上頗多相同。二本原版之字體與殘泐情況相同、補版刊工亦多同。頗疑此王集與孟集情況相同、均爲北宋末年江西所刊經南宋遞修之本。」
 (18) 南宋・陳振孫『直齋書錄解題』卷十六では「建昌本與蜀本、次序皆不同、大抵蜀刻唐六十家集多異于他處本、而此集編次尤無倫」と記され、顧廣圻は蜀本の識語において、「乃悟題『摩詰集』者、蜀本也、題『右丞集』者、建昌本也」と記す。陳鐵民氏も「以爲南宋麻沙刻本(内田注：陳氏は靜嘉堂本を麻沙本と考えている、當淵源于建昌本)。(注11所掲の『王維集校注 四冊』『王維集版本考』)としている。

表1 宋版二種の比較

書名	王右丞文集 十卷	王摩詰文集 十卷
所藏	靜嘉堂文庫	北京圖書館
版式	每半葉十二行、每行十七字至二十字不等。注文雙行。白口。左右雙邊、雙黑魚尾。上魚尾下記「王」字及卷數。下魚尾下記葉數、最下記刻工名。	每半葉十一行、每行二十字。白口。左右雙邊、單黑魚尾。上魚尾下記「摩詰」二字及卷數。版心下記葉數。
次序	前六卷は詩(卷一には「進集表(他本にはない年記があり、注目に値する)」と「答敎」を含む)。後四卷は文。	第一・四・五・六・九・十卷は詩。それ以外の四卷は文。

表2 靜嘉堂本『王右丞文集』原版・新舊補版一覽表

(紙幅の關係から、筆者が採寸した各葉版框の詳細なるデータを掲げることができないため、各巻の原・補版の別を明らかにすることとめた。なお算用数字は葉の数を表している)

目錄	12葉	原版0	舊補版0
卷一	12葉	原版0	舊補版5 (第六、七、八、九、十一葉)
卷二	13葉	原版3 (第七、九、十葉)	舊補版2 (第四、六葉)
卷三	8葉	原版0	舊補版1 (第一葉)
卷四	15葉	原版2 (第六、十二葉)	舊補版3 (第六、九、十三葉)
卷五	17葉	原版3 (第七、九、十六葉)	舊補版5 (第一、八、十二、十四、十七葉)
卷六	16葉	原版1 (第八葉)	舊補版1 (第九葉)
卷七	16葉	原版1 (第十四葉)	舊補版1 (第十二葉)
卷八	23葉	原版0	舊補版1 (第十一葉)
卷九	17葉	原版2 (第六、七葉)	舊補版1 (第十一葉)
卷十	12葉	原版0	舊補版0

同前 王昌齡

本來清淨所竹樹引幽陰
簷外含山翠人間出世心
圓通元有象聖境不能侵
真是吾兄法何妨友第
深天香自然會靈異識鐘音

同前 裴迪

靈境信為絕法堂山塵氛自然成
高致向不看浮雲透迤嶽峯岫
列參差間井分林端遠堞見風木
踈鐘聞吾師久禪寂在世超人群

黎拾遺所裴迪見過秋夜對雨之作

促織鳴已急輕衣行向重
寒燈坐高館秋雨聞踈鐘
白法調紅象玄言問老龍
何人顧蓬逕空愧求

野花叢發好谷鳥一聲幽夜坐空林寂松風直似秋

同前 裴迪

不遠灞陵邊安居向十年入門穿竹逕留客畎山泉
鳥囀深林裏心閑落照前浮名竟何益從此願栖禪

夏日過青龍寺謁操禪師

龍鍾一老翁徐步謁禪宮欲問義心義遙知空病空
山河天眼裏世界法身中莫恡銷炎熱能生大地風

同前 裴迪

安禪一室內左右竹亭幽有法知不染無言誰敢誚
鳥飛爭向夕蟬噪已先秋煩暑自茲退清涼何所求

鄭果州相過

斜日照殘春初晴草木新牀前磨鏡客林一本作樹裏灌
園人五馬驚窮巷雙童逐老身中厨辨糝飯當窓
阮家貧

春日與裴迪過新昌里訪呂逸人不遇七言

桃源一向絕風塵柳市南頭訪隱淪到門不敢題凡
鳥看竹向須問主人城外青山如屋裏東家流水入
西鄰閉戶著書多歲月種松皆作老龍鱗

同前 裴迪

恨不逢君出荷蓑青松白屋更無他陶令五男曾不
有蔣生三逕任相過芙蓉曲沿春流滿薜荔成帷晚
靄多聞說桃源好迷客不如高枕一本作醉眄庭柯

【付記】

學會發表および論文執筆に際して、入谷仙介先生、下定雅弘先生、神鷹徳治先生、植木久行先生のご懇篤なるご教示を賜り、さらに査読委員の諸先生からも有難いご意見を賜りました。また、靜嘉堂文庫では貴重な版本の閲覽をご許可戴きました。記して御禮申しあげます。